【答え】

**第１部　平家編**

A１　②貴族のガードマン

　→弓馬の芸という特殊な戦闘技能を有する職業的戦士に成長した。

A２　③お歯黒をしている

　→平家は貴族や天皇家と縁組みしていて自分も公家化していて、化粧をしたりしていた。　　そのため戦いでは化粧やお歯黒が原因で平家と見破れたりした。

A３　①中国と貿易してお金をかせいだ、②娘を天皇と結婚させた　両方とも正解。

　→清盛は有能な政治家でもあった

A４　人

A５　①烏帽子をとって髪を切った

　→どれも「横暴」とまでは言えないように思えるが･･･。当時の貴族にとってもとどり　　を見せることは恥とされていたので大変な屈辱であったという。

A６　子どものスパイを放った

　→１５～１６歳くらいの男子に赤い上着を着せて、みなおかっぱ頭だった。禿と呼ばれ　　た。

A７　①高熱を出した

　→原因不明の熱で苦しんで死んだ。「あたあた」（熱い熱い）と水が肌に触れると熱湯　　に変わるほどの熱だった。人々は現世の悪行の報いと考えたよう。

**第２部　源氏編**

A８ 父が清盛との戦で負けて捕らえられたから

　→平治の乱で義朝が討たれ、この時頼朝は幼かった。清盛の恩情により殺されずに伊豆　　に流された。しかしこの時見逃していなければ、平家は滅亡しなかったかもしれない。

A９　清和源氏と名乗り、清和天皇（５６代）につながる系統とした。

　→天皇と関係を持つのは権威を持つための大切な手段だったようだ。

A１０ 　②ほうびとして領地を与えると言った。

　→源氏は反乱軍だったので領地を自分のものにすることができたからである。平家は天　　皇に従っていたのでこうはいかなかった。源氏の軍勢は恩賞目当てに集まった者がほ　　とんどであった。

A１１　③地方の小領主

　→地域社会の小領主クラスの小名が領主の間の生き残り競争に勝つために従った。

　（わずかな下人を連れて農耕馬に乗って出陣したらしい）みんな戦いたくて戦ったわけ　ではなかったんだね。恩賞目当てとは。

A１２　③馬ごと激突して落馬させる

　→源氏は馬から相手を落として、小刀で首をかくなどの組み打ちと言われる戦闘方法を　　取り入れた。もはや格闘技だったらしい･･･。当時の老兵が最近は格闘さながらに矢　　を射ずに組み打ちで倒すと嘆いていたらしい。源氏は馬術が下手でも戦える方法を考　　えたんだね。一騎打ちでお互いに馬からすれ違いざまに弓を射るというルールを守っ　　た正々堂々とした戦いはすでに過去の美談となりつつあった。

**第３部　戦場編**

A１３　②２５キログラム

　→大鎧の重さは２２～２６キロだった。ただし、重さは馬にかかるようにできていた。　　この重さでは一人では歩くのもやっとである。矢を射るために作られたものであった。

A１４　①１３メートル

　→左が弓手、右が妻手。敵を左側に置かないと弓を使いにくいため、敵の右側を占めよ　　うと争った。

A１５　①１３０センチ

　→なんとポニーくらいの大きさ。体高平均１３０センチ（１０９センチから１４０セン　　チ）。木曽馬と呼ばれる在来種の馬で、イメージするようなサラブレッドではない。　　（サラブレッドは１６０～１６５センチ）

　　のろのろと進みここぞというときに走らせるという戦い方。それでも時速２０キロメ　　ートルで２分が限界。時代劇のように馬をばんばん走らせて刀で斬りまくるのは無理　　だった。

A１６　②地面を掘り、木で囲んだバリケード

　→当時の城とは、堀・掻楯、逆茂木などのバリケードのこと。

A１７　名乗る

　→敵軍を前にして、闘う前に出自を語り、武勇を誇る。相手方の名のある武士と戦うた　　め。

※当時の戦闘の様子

筒井の浄妙明秀　宇治川の戦い

「遠くの者は耳で聞け。近くの者は目で見よ。三井寺では知らぬ者がない。僧兵の筒井の浄妙明秀という一人で千人を相手する戦士だ。自身のある者はかかって来い。相手になってやる」と叫んで、背にした二十四本の矢を次々に連射した。たちまち敵兵十二人を射殺し、十一人を負傷させ、箙に一本残すだけとなった。

A１８　②大鎧を着て馬から下りる

A１９　①崖から馬ごと駆け下りる

　→義経が一の谷の戦いでとった有名な奇襲作戦が、「ひよどり越の逆落とし」

A２０　②名を名乗る

　→でも名乗ると「どうだ！」という感じで、悲劇性が弱まりますね。

A２１　敦盛の首を敦盛の父に送る

　→とんでもない行動！かと思いきや･･･敦盛父からとても感謝されたそうです。当時討　　たれればば、さらし者にされ、戻ってくることはなかったからでしょうか。

A２２　①味方だと嘘をつく

　→しかしお歯黒を見られてうそがばれます。

A２３　京都に送られ、義経たちの意見で、首は大路を引き回された

A２４　①敵二人を抱え込んだまま海に身を投げる